| | |
|---|---|
| 氏名 | 野 間 啓 輔 |
| 学位の種類 | 医 学 博 士 |
| 学位授与番号 | 乙 第 710 号 |
| 学位授与の日付 | 昭和50年 9 月30日 |
| 学位授与の要件 | 博士の学位論文提出者<br>（学位規則第 5 条第 2 項該当） |
| 学位論文題目 | **肝・胆道疾患における血清酵素の検討**<br>**第 1 編　肝・胆道疾患における血清 Guanase 活性の診断的意義について**<br>**第 2 編　肝疾患におけるLDH zymogram の検討**<br>**第 3 編　肝・胆道疾患における血清 γ－Glutamyl transpeptidase 活性の臨床的意義** |
| 論文審査委員 | 教授 大藤　真　　教授 平木　潔　　教授 水原舜爾 |

## 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

肝・胆道疾患において，血中での活性上昇が認められる数種類の血清酵素に注目して，その臨床的な意義を検討した。肝逸脱酵素として Guanase および LDH isoenzyme を，胆管酵素として γ－Glutamyl transpeptidase をとりあげ，各種肝病態でのこれら酵素活性の上昇の態度，程度，その上昇機序などと共に鑑別診断における有用性などを考察した。

血清 Guanase は，GOT. GPT などに比し，上昇の程度は低いが，比較的肝特異性が高く，しかも血清中での活性上昇は，急性肝炎の極期や，慢性肝障害で急激かつ高度の肝実質障害を伴ったときのみに限られるため，内科的黄疸と外科的黄疸の鑑別に有用な指標となりうると考えられた。

血清 LDH isoenzyme pattern の検討では，肝実質細胞障害時には，$LDH_{4\sim5}$ 分画の増加が特徴的で，ことに急性肝炎や原発性肝癌例においては，$LDH_5$ 分画の増加が顕著であった。急性肝炎の回復期には，LDH 総活性が正常化しても，$LDH_5$ 分画は異常に増化したまま持続する傾向が見られた。転移性肝癌例では，$LDH_{3,4,5}$ 分画の増加が著しく，$LDH_4 \geqq LDH_5$ となり，原発性肝癌とは区別された。

γ－Glutamyl transpeptidase（γ－GTP）は，ほとんどの肝・胆道疾患において，血中での活性上昇が見られたが，とくに肝癌や胆道系疾患において著明であった。急性肝炎例においては，発症初期軽度ないし中等度の活性上昇を来し，経過と共に低下して行く傾向を認めたが，回復期になお中等度以上の異常高値を維持する症例では，遷延化する傾向があった。原発性肝癌例では，腫瘍結節が大きく，肝門部や右葉に位置し，黄疸を有する症例で高い活性値を示した。転移性肝癌例では必ずしも黄疸の有無や原発巣の違いとは関係なく，肝門部に存在したり，胆管からの連続性の癌浸潤を有するときに高い活性値を示

した。原発性，転移性いずれの場合においても，腫瘍の発生，結節の増大と共に血清γ－ＧＴＰ活性の上昇，漸増傾向が認められ，本酵素活性の測定が，肝癌診断の１指標となりうるものと考えられた。胆管系疾患例においては，他の胆管酵素（Alkaline phosphatase，Leucine aminopeptidase）と極めてよく相関したが，活性上昇の程度，頻度ともに両者よりも高かった。アルコール性肝障害患者において多く認められる著明な高γ－ＧＴＰ血症は，禁酒により数週間後にはすみやかに改善され，飲酒を再開すれば，再度強い活性の上昇を来すことが認められた。

## 論文審査の結果の要旨

本研究は，肝・胆道疾患における２，３血清酵素の臨床的意義を研究したものであるが，従来十分確立されていなかったこれら酵素の臨床診断的価値について新知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって，本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。